

佐渡市博物館研究ノート No.4

令和7年3月20日発行

発行 佐渡市博物館 佐渡市八幡2041

新潟港修築工事に貢献した佐渡市羽二生の採石場の記録と遺構について

貞包 健良※1・甲斐 あけみ※2

1. はじめに

本調査を行うきっかけとなったのは羽二生^{はにゅう}集落に住む方からの「自分の集落には、かつて新潟港工事にかかわる石切場、もしくは採石を行っていた場所がある」というものだった。

『両津市誌 町村編 上』（両津市編纂委員会、1973）の「羽二生」や『両津市羽二生郷土誌』（市橋【編】、1973）には該当する記載が無いことから、今回改めて新潟港修築に関する文書や地域の方々への聴き取り調査を実施した。

併せて採石場として活用された場所が周辺と比べて何かしら地質学的特徴が見られることも期待して実地調査と文献調査も行った。

2. 羽二生集落の概略

羽二生集落は佐渡市の南東部に位置する集落である

（図1）。『角川日本地名大辞典』（角川日本地名大辞典編纂委員会、1991）によれば「農漁業地域」「江戸期廻船や船宿で栄え裏目付番所が置かれた入桑漁港は第1種漁港で、沿岸漁業の基地」と紹介されている。

佐渡市嘱託員文書の配布件数に基づく、2024年10月末時点では46世帯が属している。

3. 調査結果について

今回の羽二生集落採石場については次の方法で調査を行った。

3-1 文献情報に基づく調査

3-2 集落在住者への聴き取り調査

3-3 現地の遺構実地調査

調査した結果や判明した場所などを一括して図1に表記した。

以下、それぞれの調査方法の結果について報告する。

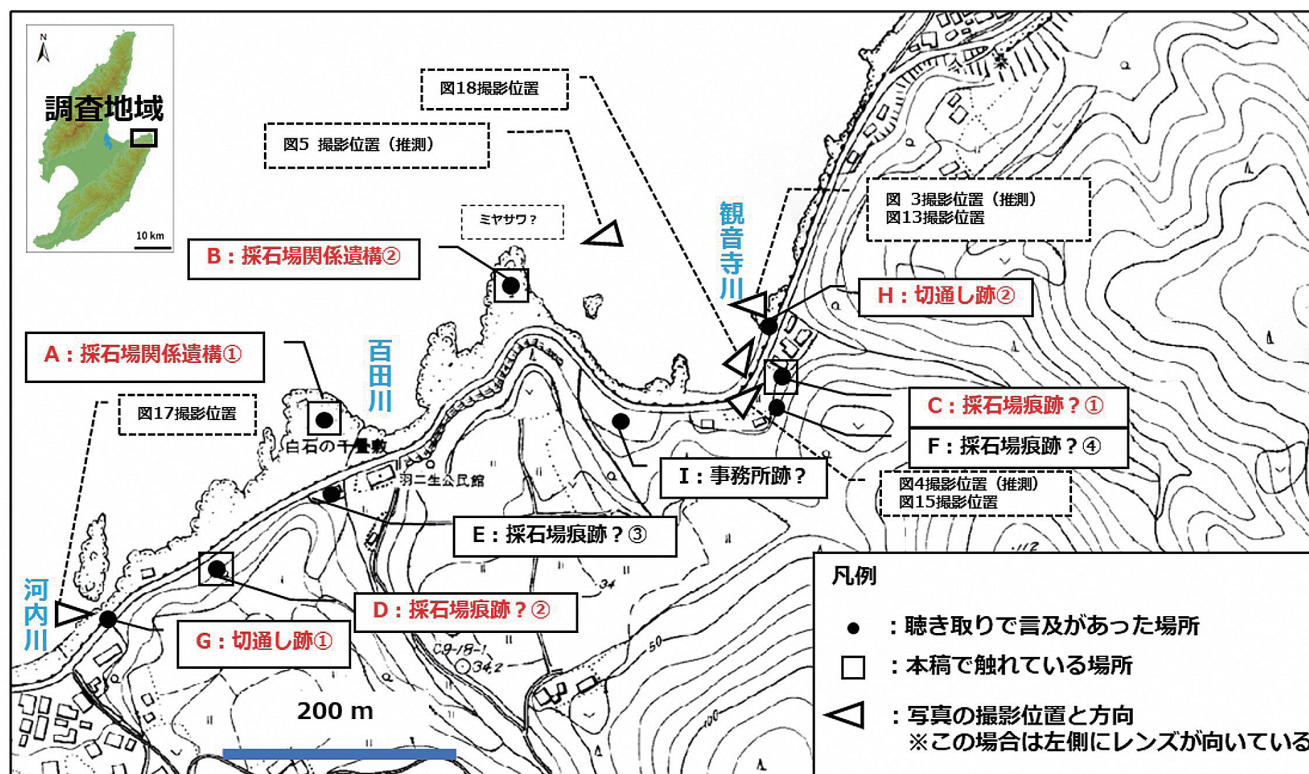


図1：羽二生集落の概略図と今回の調査で判明した石切場関係の遺構や写真位置。赤字で示した場所については本稿中で詳しい内容を述べた。なお、「切通し跡」とは内務省が工事をする過程で岬に突出していた岩を崩したと証言があった場所。G、Hともに海岸に突出した岩が残されている場所だった。

（地図は国土地理院発行 5000 分の 1 地図をもとに編集を加えた）

※1 佐渡市教育委員会 社会教育課 ジオパーク推進室 学芸員(全体の統括と執筆を担当)

※2 佐渡ジオパーク推進協議会(現地調査と集落の方々との連絡、資料整理を担当)

3-1 文献情報に基づく調査

新潟港工事と佐渡島の羽二生に関係する文書を調査した結果、表 1 に示した文書で確認できた。

表 1：新潟港工事に関連して「羽二生」の集落に関する記載を確認できた文書一覧

No	発行年	書名	著者／編者
1	1941	新潟港修築工事の概要	市石 菊治
2	1941	昭和 14 年度直轄工事年報	内務省土木局
3	1942	昭和 15 年度直轄工事年報	内務省土木局
4	1943	昭和 16 年度直轄工事年報	内務省土木局
5	1944	昭和 17 年度直轄工事年報	内務省土木局
6	1990	新潟港修築史～明治・大正・昭和～	運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所

新潟港工事については国が直轄で行ったものであるからか公式文書の記録が継続して確認できた。これにより、羽二生が新潟港の工事に関与していた地域であることが確認できた。

3-1-1 佐渡島内に採石場が設けられた経緯

羽二生と新潟港工事の関係については『新潟港修築史～明治・大正・昭和～』（運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所、1990）で網羅的に記載されている。同書によると羽二生の採石場は新潟港がある信濃川河口付近にある「西突堤」の補強、「西防波堤」の増設に伴う資材の確保のために工場が設けられたとある(図 2)。

ここからは同書に従いつつ、必要な部分は引用して佐渡島の羽二生集落に採石場が設けられた経緯を記す。

運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所（1990）によると「明治元年開港場として港の基盤を確立して以来～（中略）～昭和 14 年の本港移輸出入貨物の取り扱い量は～（中略）～ 205 万余屯を突破する盛況となった。」とあり、新潟港が順調に活用されていたこ

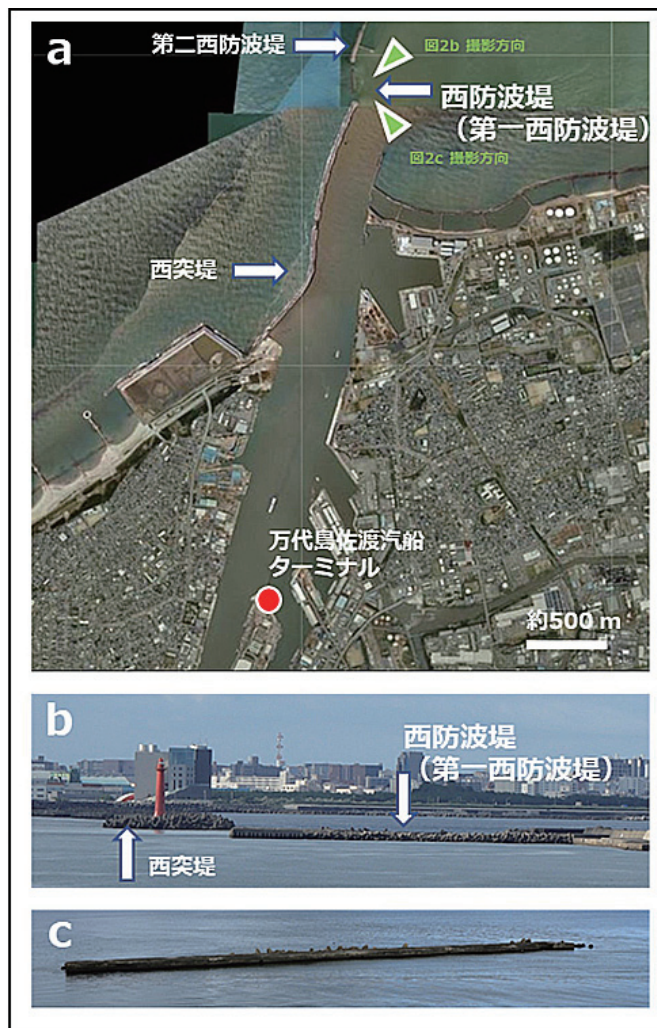


図 2 昭和 14 年の工事で補強、新築された港湾施設の現在の様子

a：西突堤と西防波堤の位置図。なお工事にに関して記載があった運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所（1990）では「西防波堤」と記載されているが、現在の新潟県の港湾施設としては「第一西防波堤」となっているので併記した（地図は国土地理院の「地理院地図」を利用して一部加工して作成した）。

b：西防波堤と西突堤の外観。

c：佐渡産の割石が使われたとされる西防波堤の全体外観。

※b,cともに 2024 年 9 月 14 日著者撮影

とが示されている。ただし、運営上の問題もあったようで同書では「（前略）出水時の埋没する土砂は少なくなく」「一方、冬季には漂砂による港内への流入も本港水深維持に少なからぬ障害を与えるほか、西北西の季節風による波浪は出入船舶に依然脅威の存在だった」と述べられている。

この問題を解決するための工事が昭和 14 年度から昭和 19 年度までの期間で計画が立てられた。その一

環として「西突堤の補強と西防波堤を新設」が提示された。

「西防波堤」新設にあたって防波堤を海上に設置する基礎工事に必要な基礎捨石を採取する必要がある、その工場として佐渡が選ばれている。

これに伴い「昭和 14 年 7 月 7 日新潟県佐渡郡両津町（現両津市）に佐渡工場を設置し、割石の採石場は同郡河崎村大字羽二生地内、および同村大字大川地内ならびに同郡水津村大字野浦地内の 3 か所に直営の採石場と見張所を設置した。」とある。

採石の作業としては「当初専ら人力さく岩機で掘穿し、ハッパ作業をしていたが、この作業方法では工事の需要を満たせず、したがって昭和 15 年度から圧縮空気のさく岩機の導入によって採石作業の能率をあげた。」と記載がある。

その後、「採石場も 2 か所増設し、同郡水津村大字水津地内、および同郡岩首村大字立間地内に設け、なお、一層採石の工程を進捗させることになった。」と記載があり結果として佐渡には羽二生を含めて 5 か所、新潟港工事に関する採石場があったと分かる。

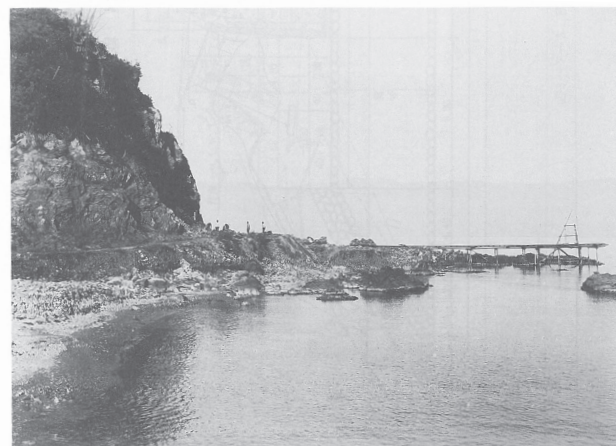
なお、これらの採石場は西防波堤建設以外に、同時期に計画された水産場の増設にも活用されたと記述がある。

3-1-2 羽二生採石場に関する記述

佐渡島内に設置された採石場のうち、「羽二生採石場」については運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所（1990）で次のように記述されている。「羽二生採石場は、両津港より交通便利な地に位置し、採石場の前面海上は石材運搬船のけい留、積出に適した湾部を形成しており、石山は海面上約 21m の高さで石材量は比較的豊富な石山である」「採石の工事は昭和 14 年 8 月 1 日に着手～（中略）～三人 1 組の人力によって、孔径 48～75 mm 孔長 2～3 m 内外に穿孔してから、これに黒色鉋山火薬を装填し爆発崩落させたものである」「（前略）採取した割石は～（中略）～または『木トロ』に積込んで海岸の集積場まで『ハンドウインチ』を用いて小運搬を行った」

採取後の石については「採石された割石の船積みは、各採石場とも海面に突出した岩盤を利用して、これに穿孔し木栈橋を架設して舟積みに備えた」と記述されており海岸の地形を活用したことが伺える。

なお同書においては羽二生採石場の写真も紹介されている（図 3）。



河崎村大字羽二生地内採石場（昭和15年10月22日）

図 3：新潟港工事にともない設けられた羽二生地内採石場
写真は運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所（1990）より

あとで述べるがこの場所は「ミヤサワ」と呼ばれている場所だと考えられる（図 1 も参照）。

3-2 集落在住者への聴き取り調査

羽二生集落在住の方に今回の「羽二生採石場」について調査を行っていることを伝えたところ 2 名の方から情報提供と資料を頂くことができた（表 2）。

表 2：聴き取り調査に協力頂いた羽二生の方々

No	氏名	生年月日	備考
1	甲斐 喜一郎 氏	1930 年 11 月 1 日	実際に採石場で働いた経験がある方
2	B（仮名） 氏	1951 年 8 月 20 日	御尊父が採石場で働いていた方

以下にそれぞれの方から提供頂いた情報や資料を示す。

3-2-1 甲斐氏からの聴き取り結果と提供資料

甲斐氏は 15 歳前後の頃（1945 年頃?終戦後であったという証言であった）、当時内務省が行っていた採石工事に関わった方である。同氏からは採石に関する場所の位置（図 1）や現地の案内、写真資料の提供を受けることができた。

頂いた施設の場所や証言が得られた場所の位置などは図 1 にまとめたとおりである。栈橋があった場所、石を切り出した場所、事務所があった場所、工事で新たに道を通した場所などを細かく教えて頂いた。

また、図 1 に記載しなかったが栈橋までは線路が敷設されておりトロッコで採石した石を運んだということであった。これは運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所(1990)の記述とも一致する。

また甲斐氏からは採石場に関する資料として写真を 2 枚提供頂いた(図 4、図 5)。



図 4：羽二生採石場前で撮影した写真
(甲斐氏提供。撮影年は不明ながら昭和 30 年前後ではないかとのこと)

図 4 は当時甲斐氏が羽二生集落にあった採石場前で撮影した写真とのことだった。位置は図 1 の C 付近で、ここが採石場の中では一番多くの石を切り出した場所とのことだった。



図 5：羽二生集落沖の採石を行っている船舶の写真
甲斐氏提供。撮影年は明確ではなく、甲斐氏の両親が持っていた写真とのこと。昭和 9 年以前のものではないかということだった。船の後ろにある岬は「ミヤサワ」、さらに背後には「白石の千畳敷」、さらに両尾集落の「宇賀神」が見られる。

図 5 は最初に聴き取りをしたことがきっかけとなり、後日甲斐氏から提供を頂いた写真である。この写真は甲斐氏の両親が所持していた写真であり、本人が生まれるよりも以前なのではないかというものである。撮影年代から新潟港の工事とは別の様子と考えられるが、昭和初期の頃から羽二生集落内で採石を行っていた可能性を示唆する写真である。

3-2-2 B 氏からの聴き取り結果と提供資料

B 氏からは御尊父のアルバム写真を提供頂いた。B 氏の父親は当時内務省の工事関係者であり、拝見できたアルバムの中には採石場や工事を行っていると思われる写真や内務省で働いていた方々の集合写真などがあった。

ここでは写真内や注釈に「内務省」「運輸省」などと文字があったものを紹介する(図 6、図 7)。

なお本稿で紹介する写真が貼られていたアルバムには「昭和 37 年 1 月求む」と書かれており、昭和 14 年から行われた新潟西防波堤工事の写真では無いと考えられる。ただし、運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所(1990)によると佐渡工場そのものは昭和 37 年までは継続(昭和 38 年に廃止となっている)して

いたとのことから、昭和 14 年に設営された採石場と関連した写真だと考えられる。



図 6：採石場の現場で撮影したと思われる写真
B氏提供。撮影年は不明ながら昭和 30 年前後ではないかとのこと。下のメモには「羽二生内務省当時の従業員」と読める。



図 7：事務所建物写真前での集合写真
B氏提供。下のメモには「昭和 36 年佐渡工場事ム所で記念写真(?)」と記述がある。また写真に写っている看板には「運輸省『新潟港修築工事事務所(?)』」の文字がある。

3-3 現地の遺構実地調査

3-1、3-2 の調査をもとに羽二生集落内の現地調査も実施した。

現地調査においては聴き取り内容の確認と採石場として活用される地質学的特徴があるのかも確認した。地質学的特徴については文献で調べた結果も併せて併記する。

大きく A ～ H の場所に区分し、特に新潟港修築工事と関連すると思われる場所から順に結果を示す。それぞれの位置は図 1 に示した。

A：「採石場関係遺構①」(白石の千畳敷)

A-1 石切場関連の遺構物①について

A-1 は「白石の千畳敷」と呼ばれる場所にあり、羽二生集落の百田川河口部から西側に広がる海岸である(図 1 参照)。岩石海岸で、平坦部分については波食台と思われる。この場所については甲斐氏から「石切場で切り出した岩を船に積み込むための栈橋があった」と証言があった場所である。

現地調査では、海岸には人工的に作られたと思われる穿孔跡が確認できた(図 8)。

この穿孔跡は複数見つかっており、2 列セットとなって海岸へと伸びているのが確認できた(図 9)。

甲斐氏の証言と併せて考えると、この穿孔跡は栈橋

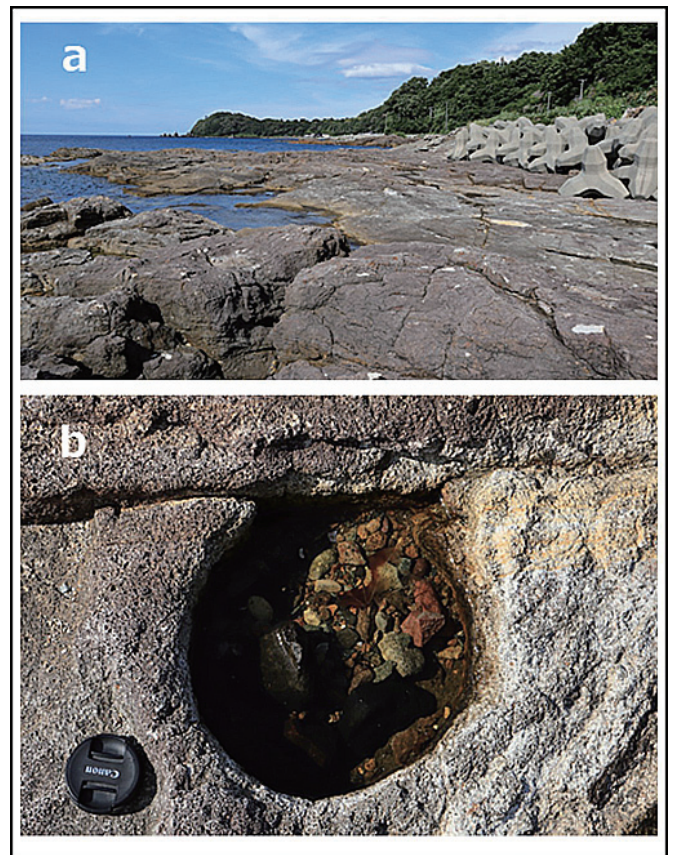


図 8：白石の千畳敷

a：千畳敷の外観。図 1F 付近から東側を向いて撮影している。

b：海岸上に見られる穿孔跡の 1 つ。カメラのレンズキャップの直径が 49 mm。

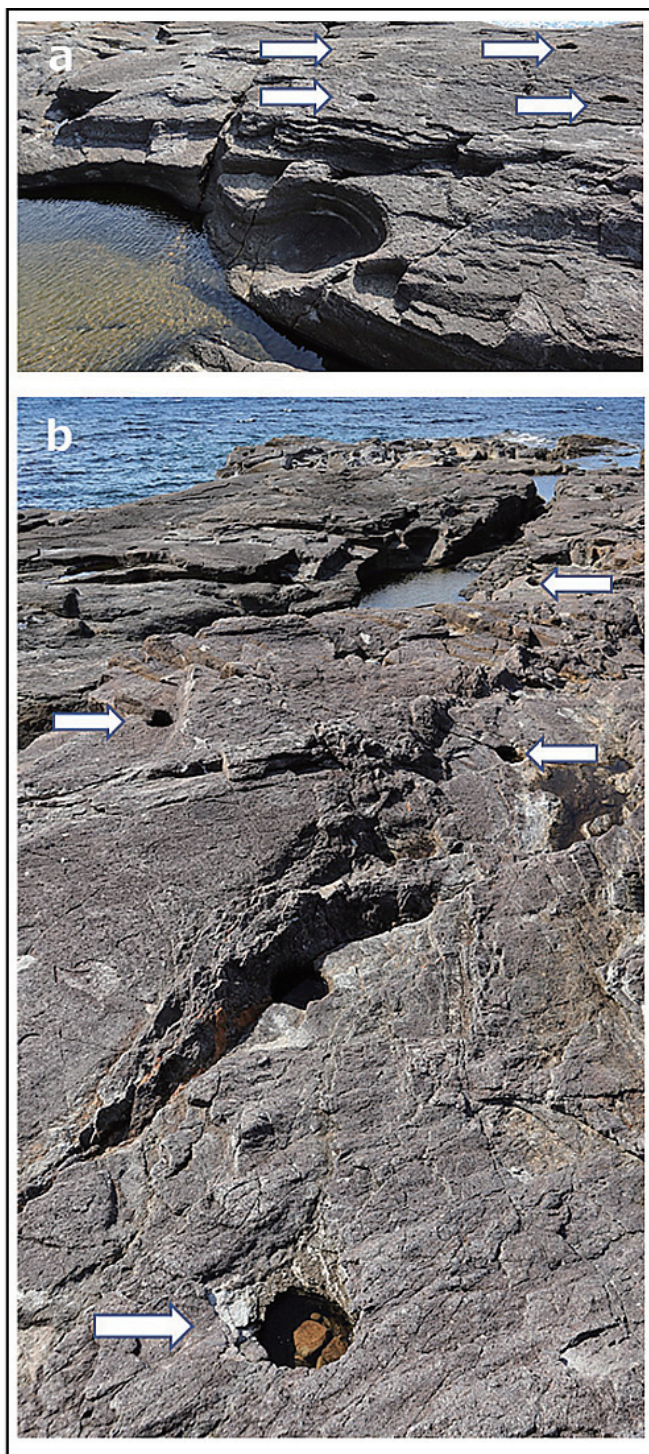


図9:列状を示す穿孔跡(矢印部分)

a: 複数ある穿孔跡は2個1対となっていることが多かった。この図では写真左側が北向きで、外海に向かって列が伸びていることが分かる。

b: 陸側から海に向かって伸びる穿孔跡の様子。この写真では上側が北向き(海側)で下側が南向き(陸側)である。

を築いたときの支柱をはめ込んでいた構造物と考えられる。

またこの海岸には文字を刻んだ石が見られており、周辺にも明瞭ではないが切り出したあのようなもの

がある(図10)。

この文字を刻んだ刻印は石切場で報告例があるもので(例えば、佐渡市教育委員会 2009、小豆島石丁場調査団 2022)、今回の現地聴き取りでは証言はなかったが、この千畳敷自体も石切場として活用されていた可能性がある。

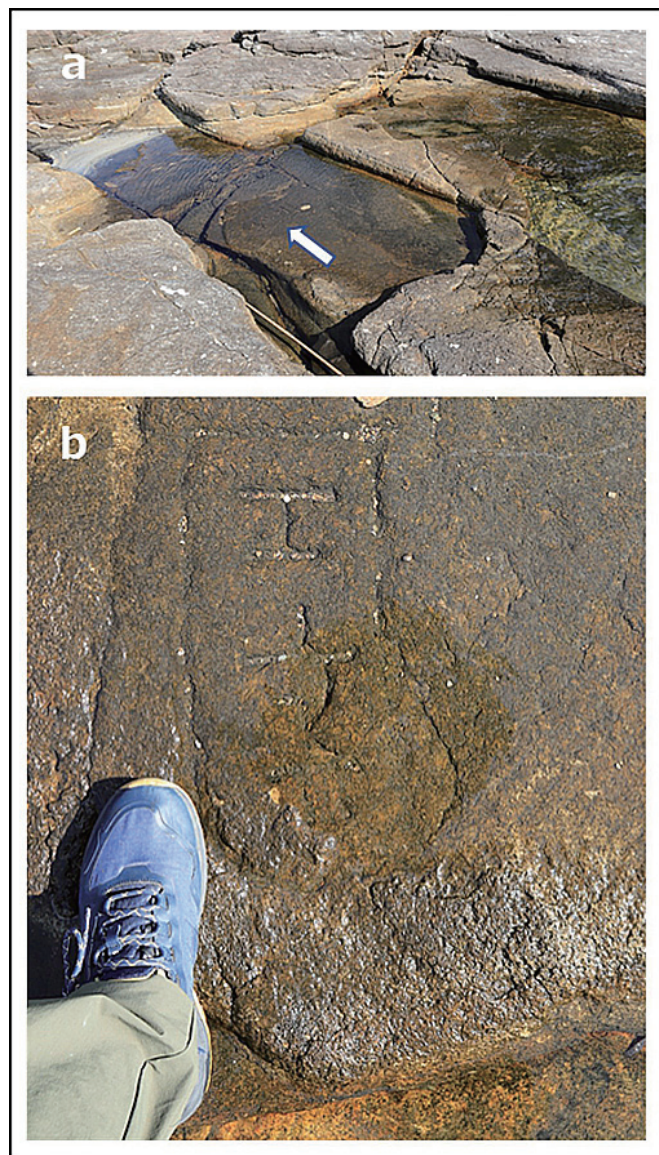


図10:海岸の切り出し痕と思しき構造と刻印

a: 千畳敷には明瞭ではないものの鋭角に切られたような構造がいくつか見られる。aはその構造の1つで、矢印部分に文字らしき刻印があった(図9b)

b: 刻まれていた文字らしき刻印。写真にある足のサイズがおよそ26 cm。

A-2 千畳敷の地質学的背景と古地図との考察

今回の現地調査を行った中で千畳敷と呼ばれる場所は流理構造をもつ岩石(流紋岩)があることが確認できた。また地質図を参考にした範囲でもこの場所は流紋岩が分布していると調査結果がある(図11)。



図11：白石の千畳敷地質学的特徴

- a：産総研「20万分の1日本シームレス地質図」で示した羽二生周辺の地質図（一部改変）。白石の千畳敷から「ミヤサワ」付近の岩相が周辺とは異なることが描かれている。
- b：百田川河口部から西側を向き千畳敷を撮影した様子。白色の岩が目立って観察できる。
- c：百田川河口部の岩石は特に流理構造が確認できる。レンズキャップの直径が49 mm。
- d：百田川からさらに西付近（千畳敷中心部分）になると白さが落ちるが、流理構造が目立つ。この流離構造にそって石を切り出したかのように見える階段状の構造が見られる。

矢穴などは今回の調査では確認できなかったが、人工的に石を切り出したような鋭角な跡が見られることから（図 9a、図 10d）、流理構造を活かした採石が行われていたと推測する。

石を切り出した跡があることから過去の千畳敷周辺の様子を伺うために石井（1842）を参考にした（図 12）。

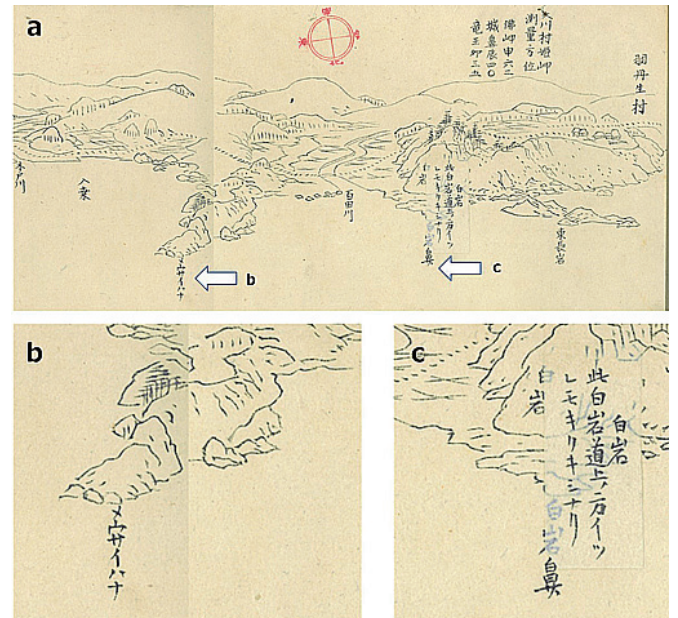


図12：佐渡海通測量野帳の羽二生周辺の図（石井、1842）

- a：今回調査を行った範囲の全体図。羽二生の地名が当時の「羽丹生村」で表記されている
- b：地元で「ミヤサワ」と呼ばれている鼻
- c：地元では「白岩の千畳敷」と呼ばれている場所。この頃から白石の千畳敷周辺は「白岩」「白岩鼻」と認識されていたことが伺える（2ページの図を合成した）。なお、画像データは新潟県立図書館の公開データを用いた。

石切り場の記載は無かったが白石の千畳敷は崖の部分を「白岩」、海岸部分が「白岩鼻」と称されていたことが分かる。

このことから、当時の人々がこの千畳敷周辺が白色の岩石が特異的に出ていたこと（流紋岩が露出していたこと）を認識していたのではないかと推測する。

B：「採石場関係遺構②」(ミヤサワ)

千畳敷から東側にも 1 か所海に突き出した岬（鼻）があり、羽二生では「ミヤサワ」と呼称している。なお石井（1842）では著者は読解できていないが「メ□サイハナ」と記載されているように読める（図 12b）。



図13：現在のミヤサワ（東側から西を向いて撮影）
図3はこの位置から撮影していると考え。図5はより沖合からの撮影と考える。

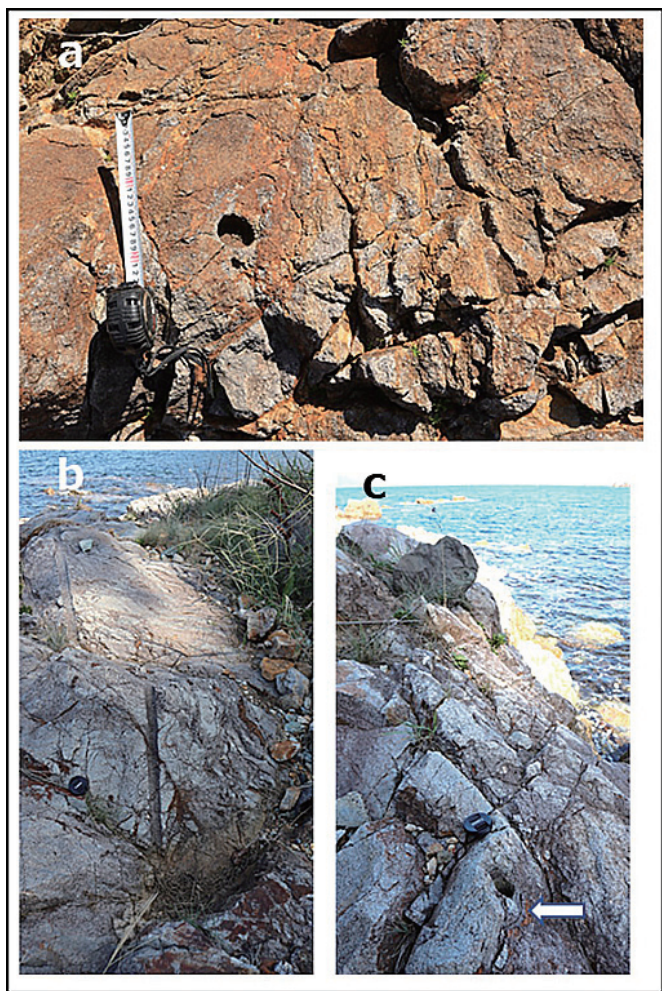


図14：ミヤサワに見られる穿孔跡など
a：ミヤサワで見られる穿孔跡の一例。千畳敷のものと比べて直径が小さい。
b：千畳敷では見られなかった削岩機で穴をほったような穿孔痕。
c：一部、穿孔の深さが深いものも見られた。
※レンズキャップの直径はいずれも49 mm

この「ミヤサワ」が運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所（1990）で紹介されていた写真（図 3）、そして写真提供を受けた古写真（図 5）で写っている場所ではないかと考えられる（図 13）。

この岬についても現地調査を行った結果、数か所だが千畳敷と同様の穿孔跡が見られた（図 14）。

ただし、この穿孔跡は千畳敷で見られたものよりも直径が小さい。また千畳敷のものと違い系列だつて沖合に延びている様子なども今回は確認できなかった。

C：「採石場痕跡」

採石場として活用されていたとされる場所はいくつかあったと証言を得ているが、図 1C がもっとも規模が大きかったと聴いている。

また提供を受けた図 6 もこの場所を採石していた写真とのことだった。ただし現在は建物が建っており、採石の詳細などは調べられなかった（図 15）。



図15：採石場の1地点だった場所
羽二生地内あった採石場で、この場所が一番規模の大きい箇所だったとのこと。現在の家屋が立っている平地が採石によって作られたと証言があった。

そのほか現地確認の中では図 1F で採石していたという証言があった。現地を確認したが（図 16）、採石の矢穴や穿孔の痕跡は確認できていない。

また甲斐氏からは採石場に関連した工事として羽二生集落の海岸沿いに道を設けるとときにいくつかの岬を切通したという証言があった。それらの場所は位置が分かるように海に出ていた部分の岬を切通しとして残していたということで、実際に図 1G、H の位置には岬の名残と思われる岩が見られた（図 17、18）。



図16:D地点の採石場痕跡?②

採石が行われていたと証言があった場所。鋭角に岩が露出しているが、切り出しのせい、節理にそっての崩落なのか判断がつかなかった。



図17:G地点の切通し跡①

甲斐氏から道路を通すときに岬を切通した場所と証言のあった場所。白線はイメージとして著者が追記した。当時は白線のように写真右の崖へと岬が突き出ていたとのこと。なお、この地点がちょうど白石の千畳敷と同じ流紋岩が見られだす地点であった。



図18:H地点の切通し跡②

甲斐氏から道路を通すときに岬を切通した場所と証言があった場所。白線はイメージとして著者が追記した。図15で紹介して「採石場痕跡?①」の近傍である。

4. おわりに

今回は地元の方からの情報提供をきっかけに佐渡市羽二生集落にある石切場の調査を行った。

結果として口頭で聴いていた新潟港修築に関する採石場があったことが文献、証言、遺構で確認できた。

調査を終えて今後の展望を述べる。

(1)各海岸にある遺構の正確な分布調査

確認された遺構についてはまだその分布の一部を確認しただけで、正確な測量などを行えていない。今後は当時の様子をより伺い知るために遺構（穿孔跡や採石場など）の正確な測量や分布調査を行う必要がある。

(2)羽二生周辺の石切場活用歴史調査

今回の調査では羽二生集落は昭和 14 年以前から採石などを行っていた可能性が見えてきた。運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所（1990）においては羽二生の採石場については、両津港工事にも活用されていたことが伺われる記述がある。

また、両津地区牛尾神社の明治 37 年に完成したという石碑には羽二生から石材が寄贈されたという記載が見られる。

羽二生集落では今回注目した昭和 14 年以降の採石場の活用歴史以外にも、より昔から採石などの活用歴史があったか追加調査することで現在明らかになっていない歴史を明瞭に出来る可能性がある。

(3)採石が行われた場所の地質学的特徴の把握

今回、遺構があった場所は周辺と比べて、流紋岩と呼ばれる岩が特異的に分布している地質学的特徴があることが分かった。羽二生周辺の詳細な地質調査を行い、併せて過去の工事記録との関連を検討することで地質学的な特徴が人々に与えた影響をより考察したい。

(4)羽二生以外の石切り場遺構の調査

今回の新潟港工事の調査によって、羽二生以外にも両津各地に採石場があったことが判明した。今後は羽二生と同様に関連する遺構が残っているかを調査し、佐渡島内における新潟港修築工事の実態をより深く考察したい。

【謝辞】

本原稿作成にあたり、採石場の存在を最初に教えてくださった羽二生在住の市橋秀紀氏にお礼を申し上げたい。氏からの繰り返しの声かけが無ければ、今回の調査を行うことはなかった。また貴重な話や資料、現地調査にもお付き合い頂いた甲斐喜一郎氏にお礼を申し上げる。同氏の協力が無ければここまで採石場の詳細について理解することはできなかった。B氏からは貴重なアルバムを長時間お借りした。羽二生以外の採石場や当時の様子を写真からうかがい知ることができ、今後の調査の展望を持つ事ができた。羽二生の集落の方々には 2024 年 7 月の説明会で本調査の途中経過について真剣に話を聞いて頂くことができた。集落の方々の面白そうにしてくださっている様子が、本件を調べる上での励みとなった。

佐渡市立中央図書館司書の伊藤優美氏には資料検索にあたって多大な協力を頂いた。氏のおかげでこちらが見逃していた資料と出会うことができた。また新潟県立図書館の方々にも資料や情報提供で協力を頂いた。図書館の方々の協力がなければここまで確かな文献による裏付けはできなかった。北陸地方整備局新潟港湾・空港整備事務所には『新潟港修築史～明治・大正・昭和～』に掲載されていた「羽二生採石場」の写真利用を承認頂いた。この写真を再度示せることで羽二生集落に採石場があったことをより明確に示せることとなった。

最後に、同僚であるジオパーク推進室と協議会の方々にお礼を申し上げる。資料作成や原稿作成が佳境のなかで仕事の分配などに最大限の配慮を頂いていた。皆様のおかげで原稿を書き上げることができた。

記して感謝申し上げます。

5. 参考文献

- 市橋仙千郎（編）、1973、両津市羽二生郷土誌、羽二生公民館
- 市石菊治、1941、新潟港修築工事の概要、土木協会、『土木』62号、P17-26
- 石井彩助、1842、佐渡海岸通測量野帳 2（新潟県立図書館所蔵のものを引用した）
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会、1991、角川日本地名大辞典、株式会社角川書店
- 内務省土木局、1941、昭和十四年度直轄工事年報、内務省土木局
- 内務省土木局、1942、昭和十五年度直轄工事年報、内務省土木局
- 内務省土木局、1943、昭和十六年度直轄工事年報、内務省土木局
- 内務省土木局、1944、昭和十七年度直轄工事年報、内務省土木局
- 両津市誌編纂委員会、1983、両津市誌 町村編上、両津市
- 佐渡教育委員会、2009、佐渡金銀山 吹上海岸石切場跡調査報告書、佐渡金銀山遺跡調査報告書 11
- 産総研地質調査総合センター、20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2、オリジナル版（地質図更新日：2024 年 9 月 6 日）
- 小豆島石丁場調査団、2022、令和 3 年度小豆島大阪城石垣石丁場調査概報加藤家・藤堂家の石丁場、小豆島石丁場調査団
- 運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所、1990、新潟港修築史～明治・大正・昭和～、運輸省第一港湾建設局新潟港工事事務所編

庄子 遥

はじめに

筆者は宮城県仙台市で生まれ育ち、大学で民俗学を学び、卒業後の令和 6 年4月から佐渡博物館に勤務している。社会人1年目は、様々な生活文化や歴史を見聞きし、経験し、日々少しずつではあるが佐渡を知る日々であった。

本稿では、佐渡1年目の筆者がフィールドワークを通して経験したことを述べてみたい。

裂織り

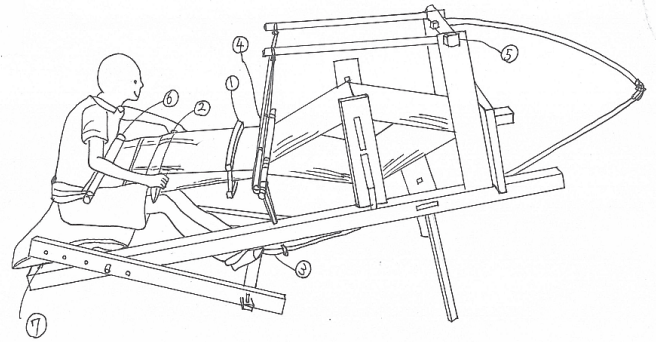
佐渡の裂織りについては佐渡に来る以前から耳にしており、佐渡で学びたいことの1つであった。実際に5月から相川技能伝承展示館と新穂資料館へ通い、裂織りの織り方を学ぶ中で一口に裂織りといっても機織り機の違い、材料など様々な違いがあると知った。

先ず裂織りについてだが、歴史や変遷、材料の作り方、織り方、機織り機などはすでに佐藤利夫、古河静江、柳平則子等の各氏によって詳細にまとめられているため本稿では簡単な紹介に留め、筆者が経験した裂織りについての報告を中心に記していく。

裂織りというのは、緯糸^{よこいと}にひも状に裂いた布を用いる織物である。木綿が容易に入手できるようになる江戸時代後期までは、植物から取り出した繊維を利用しており、経糸^{たていと}にシナノキの皮の他に麻、藤、山芋^{やまも}、芋^{ちよ}麻^まなどを用いた。裂織りは、山で木を切ったり、炭を焼いたり、あるいは風の強い海上での漁など厳しい自

然を相手にするための丈夫で暖かい仕事着として重宝された。

裂織りにはネマリバタ(図1)・ハタゴ・イハタと呼ばれる地機とタチハタと呼ばれる高機の2種類の織り機がある。タチハタの普及は木綿織の普及と関わっているが、国中を除いては、明治時代になってからである(柳平、1983)。



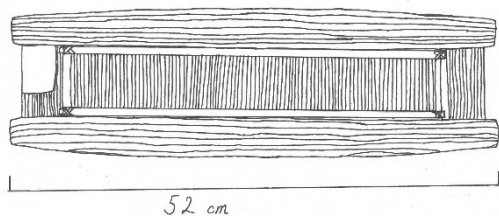
(図1)ネマリバタ 筆者作図

①箴、②杼、③足縄、④綜統、⑤ロクロ、⑥千巻、⑦腰掛け板
裂織りによって布を織るには48種類の道具を使うといわれ、数多くの工程を踏まねばならず、先述したように草や木の皮から経糸を紡ぐには気の遠くなるような作業が必要である。現在、相川技能伝承展示館や新穂資料館で体験できる裂織りで使用する経糸は木綿糸である。また、裂織りによって布を織りあげるには①経糸の用意、②整経、③オサとおし、④アザリ返し、⑤チキリ巻き、⑥へかけ、⑦ハタぞろえ、⑧オリクサといった工程があるが、筆者が実際に行ったのは主に緯糸となる⑧オリクサである。

ネマリバタ、タチバタを利用しての織布の方法についてはその他の情報と同様に先行研究で詳細にまとめられているので省略し、ここでは筆者が体験した際に

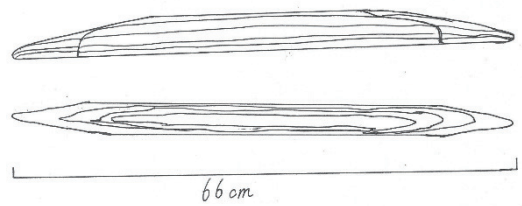
感じたネマリバタとタチバタの違いを記録する。

ネマリバタはその名の通り低くネマル（座る）姿勢となる。腰かけ板に座り経糸を腰に固定し、片方の足首に足縄をかけて綜統を操作する。足にかけた足縄を引くことで綜統が動き、緯糸を通す隙間が生まれる。この足縄を引く動きはなんてことのない動きに思えるが普段使うことのない筋肉を動かすため徐々に疲労が蓄積され、はじめてネマリバタで裂織りを体験した翌日は筋肉痛になった。ネマリバタで裂織りをする際の難所となるのは経糸に緯糸を通すことである。足縄を引いて経糸を上下に分けたら、その間に緯糸を通す。この時によく見ていないと緯糸が経糸の途中で外れてしまったり、経糸をいくつか飛ばした状態で織ったりしてしまう。熟練した織り手はすいすいと足縄を引き、緯糸を通していくが、筆者は何回も経糸を飛ばしたり、足縄を引くタイミングを間違えたりなかなか進めることができなかった。緯糸を通した後は、経糸を通してある箆おさ（図2）で軽く緯糸を押さえ、布を折りこむために杼（図3）を強く打ち込むのだが、この力加減がなかなか難しい。弱すぎると布がほつれやすくなるが、だからといって力任せに打ち込んでも折り目の仕上がりがよくない上にはやく疲れてしまう。



（図2） 箆 筆者作図

相川技能伝承展示館所蔵



（図3） 杼 筆者作図

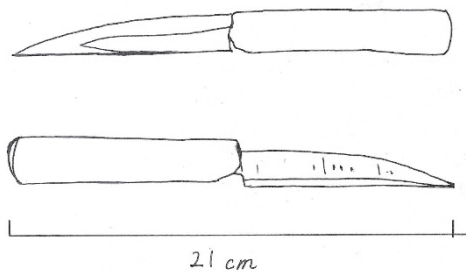
相川技能伝承展示館所蔵（ケヤキ製か）

杼を打ち込む際のよい力加減は音でわかるといい、「トントン」というきれいな音が鳴っているとよい。この音はぜひ相川技能伝承展示館に訪れて聞いてみてほしい。筆者が2時間ほどネマリバタでの裂織りを体験し、立ち上がった際にネマリバタの位置が開始時より50cmほど後ろへ下がっていることに気づき驚いた。隣で機を織っていた織り手の台は後ろに下がっていない。これは杼を必要以上に強く打ち込んだことで、その反動によってネマリバタが後ろへ下がる現象で、慣れた織り手達は、布がほつれないよう強く織り込みつつ、台が後ろへ下がらない絶妙な力加減で杼を打ち込むという。

タチバタハはタカハタ、オオハタゴとも呼ばれ、機に座るという点ではネマリバタと同じであるが、織り機の柱にかけた横板に座るため椅子に座るような姿勢になる。また、経糸を上下に分けるための引縄が2本あり、それらが2本の踏板に繋がっており、左右の踏板を交互に踏むことで経糸を交差させ緯糸を通し編んでいく。経糸の引縄が1本で、直接足にかけて引くネマリバタとの違いである。ネマリバタとの違いは他にもある。ネマリバタは緯糸を通した後、重い杼を打ち込むが、タチバタには杼はなく、箆を使って緯糸を打ち込む。簡単にほつれないようにある程度強く緯糸を下げる必要はあるが、ネマリバタの杼を打つよりは少

ない力で緯糸を寄せることができる。また、箆を打つ際、左右の手の力加減によって布の幅が変わるため偏らないよう力を入れる必要があり、箆を下げる強さによって緯糸の詰まり具合が変わるため、きれいに仕上げるには均一に力を入れる必要がある。

緯糸に使う裂いた布をサヨリ、サッコリと呼ぶ。今回は緯糸の支度も経験した。筆者が布を裂く際には裁ちばさみを使用した。かつてはサヨリサキや、クサキリホウチョウ（図4）と呼ばれる片刃の包丁を使った。

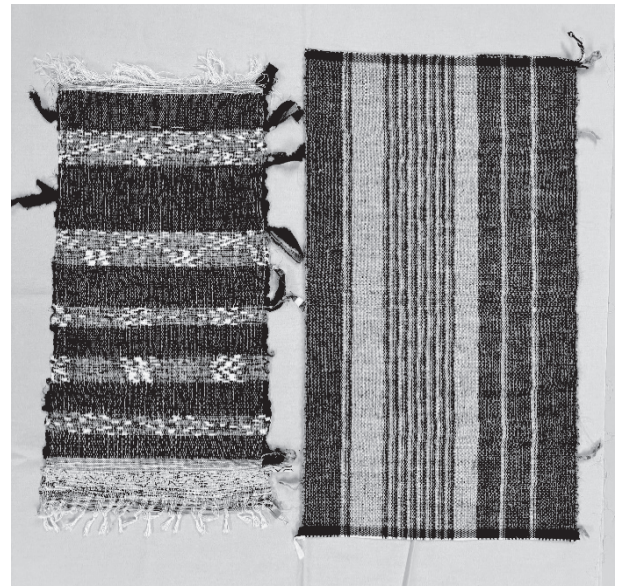


（図4） サヨリキリ 筆者作成

布を裂くときは、布を両手でピンと張って持ち、サヨリサキの先端を布にさし引くようにして布を切る。布端は切り落とさず、一枚の布が1本の紐になるように裂き、裂いた布を玉にしておき、布を織る際に使う分だけイトカケに巻き付ける。布を縦に裂くか、横に裂くによって織り上がりの柄が変わる。新穂資料館（サッコリサークル）では、裁ち鋏を使い、布を裂き、裂いた布をイトカケに巻き付けて緯糸を通す。布を裂く際は木綿布であれば7、8mmほどの幅で裂くが、布の素材によっては1cm幅で裂くこともある。

筆者が裂織りを経験したのはたった数回で、さらにその内容も織布のみで”体験した”という程度のものであり、織り手への聞き取りも行っていない。今回筆者が織った裂織りの出来栄も、布端が揃っていないかつ

たり、織り幅が不揃いであったり（図3）とまだまだ練習が必要である。今後は織布のみならず、経糸の通し方など織り機の整備についても学び、織り手の一人になることに加え、織り手へ聞き取り調査を行い、どのようにして裂織りの技術を身に付けてきたか、かつて家内で伝わってきた裂織りが現代のではどのように伝承していくかについて調査を行いたい。



（写真1） 筆者製作裂織り 筆者撮影

左ネマリバタ使用、右タチバタ使用 機により布の締まり具合も異なる

おわりに

本稿では、令和4月から佐渡博物館での勤務を開始した筆者がフィールドワークを通して経験したこと、興味を持ったこと、疑問に思ったことを記してきた。裂織りについて先行研究に依拠しつつ、筆者が経験したことをまとめたが、実際に布を織ることに夢中になり、織り手への聞き取りを行っていない。民俗学的手法として聞き書き調査は重要であり、必須であるが本稿ではそこまで至ることが出来なかった。また、本来

筆者の関心の主題である生業と信仰の関わりについても踏み込むことができていない。今後は、裂織りと信仰の関わりについても調査を行いたい。

本稿は佐渡を学ぶ上でのほんの一步にすぎず、まだまだ稚拙なものであるが、「あるいて、みて、きく」という民俗学者の宮本常一が示した研究姿勢を念頭に、フィールドへ出て、様々な話者に会いたい。

〈参考文献〉

九学会連合佐渡調査委員会 ,1964,『佐渡自然・文化・社会』,平凡社

佐藤利夫 ,1975,「佐渡の木綿以前」『日本民俗学会』99号,pp25-41

柳平則子 ,1983,『月刊染織α』No.22「佐渡の裂織り◎その歴史と技法」,pp31-37

佐藤利夫 ,2005,『ものと人間の文化史 128・裂織 木綿生活誌』,法政大学出版局

【史料紹介】

江戸時代における佐渡人の旅

「弘化五年西国順礼道中記泊宿払覚」より

下谷 徹

はじめに

旅は、各地の文化に直に触れ、また、その土地の景勝などを見て巡ることから、旅行者の見聞を広めると共にその後の暮らしの糧にもなるものである。

江戸時代の佐渡の人たちにとっても旅は同じであったものと思われ、島内の各地には旅の様子を記録した「旅日記」が散見される。

本稿では、佐渡市水津に遺る旅日記「弘化五年西国順礼道中記泊宿払覚」を通し、江戸時代における佐渡人の旅の様子を紹介したい。

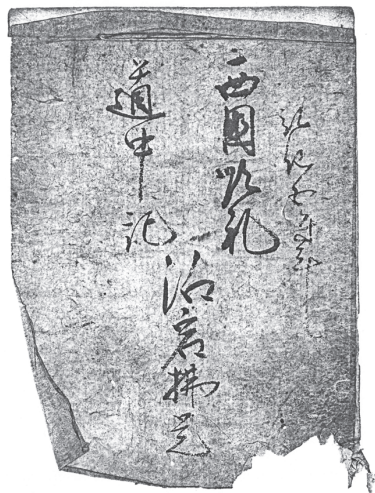


写真 1 「弘化五年西国順礼道中記泊宿払覚」表紙

江戸時代の旅の様子

江戸時代の佐渡には、「出判」といって佐渡だけに設けられた島外へ出国する者の人数などを制限する制度があり、人びとは自由に島の外へ出かけることが難しかった。

この出判制度の経緯や取決めなどについて、橘正隆は次のように述べている。出判には、最初人数制限が無かったものの、正徳年間（1711～1716）頃から一か年 759 人に出国者数が制限され、宝暦（1751～1764）以降は村高 100 石につき 1 人と規制が強化された。正徳三年諸役人勤書によれば他国出判割付人数が定められ、一か年高人数 759 人、内町方 51 人、在方 435 人、松前行きの者

273 人となっている。なお、この制限を受けなかったものとしては、役人・御雇町人、後藤座の者とその飛脚・僧侶・神職・修験・医師・廻船に従事する者などがいた。[橘 1947 94～95] また、身上稼ぎ人・職人・病氣療養湯治人なども制限の対象外とされた。[相川町史編纂委員会 2002 83]

このように、出判は「島民旅行の自由を奪った上に、余儀なき旅行者より多大な手数と経費を強要」[橘 1947 98] する制度であったことから、当時の佐渡の人たちにとって島外へ旅に出ることは容易ではなかったことが推測されるのである。

しかし、時代が下り、社会の情勢や人びとの暮らしが変わるにつれ、江戸時代の旅行の形態も変化したようである。このあたりの経緯については、鬼頭宏が「文化・文政期（1804～1818・1818～1831）は庶民の旅行という面でも、大衆化への転換点であった。（中略）この時代になると伊勢参り、熊野詣、善光寺参りのほか、各地の霊場巡礼や大山・富士・御岳などの山岳信仰というように、信仰と結びつき、それを口実にしたレジャーとしての旅行が多くなった。それが可能になったのは、所得が増加したこと、講という信仰で結びついた組織ができて、集団的な旅行を金銭的に保証し、安全に旅行することができるようになったからである。」[鬼頭 2010 283]（文中（ ）は筆者加筆）と述べている。また、同じ頃の記録として、「文化二年六月善光寺参道中覚書」「安政六年五月坊ヶ崎村百姓の出羽三山道中記」[新潟県 1981 1003～1007] の佐渡人による旅行記が確認でき、「佐渡に残っている「旅日記」をみると、宝暦ごろまでのものは少なく、ほとんど近世後半期に書いたものである。」[佐藤 2007 46] ことから、鬼頭の見解については、同じ頃の佐渡に対しても当てはまるものと考えられる。

史料の概要と作成の経緯

史料が所在する佐渡市水津は、江戸時代から現在までを通し約 40 戸を数える集落であるが、江戸時代には、坂越屋・和泉屋・木屋・越前屋・越後屋・加賀屋・網干屋・河内屋などの廻船問屋が軒を連ね、水津村をはじめとし近隣の片野尾村・月布施村を管

轄する浦目付役所が置かれていた。

「弘化五午年西国順礼道中記泊宿払覚」は、廻船問屋衆の一軒である坂越屋に保管されていたものである。史料には、佐渡を発ってから対岸の本州へ渡るまでと、本州から佐渡への帰路に関する箇所が残念ながら欠けてはいるものの、それ以外に訪れた場所と金銭支払いの状況が、1848（弘化 5）年 3 月 23 日から 5 月 24 日に渡って書き綴られている。

ところで、江戸時代の佐渡の人たちにとって、信仰と旅を結び付けるものの一つに伊勢参りがある。

「昔は各地から毎年数名ずつ伊勢参りに出たが、それには一か月の日程と多額の費用がかかった。従って度々は伊勢まで行くことができない。そのため、各地では講中を作り年に数回集まって天照大神の掛軸を拝し、頼母子によって講中から毎年数名ずつが伊勢皇大神宮に参詣した。（中略）神明講、「お伊勢参り」をする代りに、講中で天照皇大神宮の軸を掲げて拝する講である。」[新潟県 1984 768] とあるように、水津においても三か所ある居住域の家々をそれぞれ均等に振り分けした 3 組の講仲間が組織されている。現在も、当時の代参たちの苦労を労い、また村に残って留守を守った講仲間たちによる御利益分配を願う振舞いが、毎年 2 月 16 日、講組ごとにおこなわれている。この振舞は、「おみき（御神酒）」と呼ばれ、講仲間にご馳走を振る舞う当番の家を「おみきやど（御神酒宿）」と呼んでいる。この当番宿は毎年持ち回りとなるのだが、その規模や料理の豪華さは婚礼や葬儀にも劣らないほど贅沢なものである。

さて、「弘化五午年西国順礼道中記泊宿払覚」の訪問先は、旅の目的であったと思われる伊勢への参詣を中心に、越後鯨波・信州善光寺・信州妻子・紀州那智山・紀州中辺路・高野山・大阪・大和壺井・近江石山・京都・摂州高砂・讃州丸亀・備前早島・若狭小浜・美濃白石・越前鯖江・加賀大聖寺などであり、この旅が、信仰のためのものでありながら、観光としての物見遊山と訪れた地域からの情報の取得なども目的とするものであったことがうかがえる。このことから、江戸時代の旅は、旅をする人たちだけでなく、村に残った人たちの知識見聞を広めるためのものでもあったと思われる。

また、旅に参加した者は、惣五郎・庄蔵・作蔵・庄吉・新蔵・坂越屋・紋右衛門、伊兵衛・源蔵・兵三・金十郎・伊左衛門・河内屋・伊之助の 14 名（旅費の支払者として 14 人の名が出てくるが、記された記録では「13 人分・・・」とあるので、旅の途中で帰った者もいたようである。）で、村の各講組を代表し旅に参加したことが想像できるが、それぞれが各訪問先での宿代などを手分けして支払った出金録が記されている。

これらのことから、この史料は、帰郷後、訪れた場所の様子と頼母子によった旅費の使途を報告するために記録されたものであったことがわかる。

「弘化五午年西国順礼道中記泊宿払覚」の内容

前述したように、この旅日記の目的の一つは「伊勢参り」にあったと思われるが、江戸時代の佐渡から伊勢への旅程については複数の方法があり、「伊勢参宮には北陸道を経ていくものと、信州経由で行く場合、江戸経由などがあった。」[佐藤 1991 12] が代表的なルートで、水津の人たちは信州経由の行程を選んでいる。

「弘化五午年西国順礼道中記泊宿払覚」は、江戸末期における佐渡から伊勢・上方への旅程（越後鯨波から加賀大聖寺まで 60 泊 61 日の記録が残る）を記したものとして、典型的な史料であると思われるので、その一部を紹介する。

なお、各場所に現在の行政地名を付しておいたが、地図と対比し読んでいただければ、一つの目的地に到着するまでの移動距離が一日に 50 ～ 60 km にも及ぶことがわかり、江戸時代の人たちの健脚ぶりや行動範囲の広さに驚かされるものと思う。

〔表紙〕

弘化五午年
西国順礼道中記泊
宿拂覚

〔前欠〕

一 金式朱佐屋ニ而遣

惣五郎出す

べ壺分式朱ノ出しニ成ル

一 三月廿三日 越後鯨波泊（新潟県柏崎市鯨波）

旅籠丁百六十五文

十三人分ベ丁貳貫百四十五文

此所へ金壺分ヲ拂丁

五百八十五文

金ハ惣五郎出ス

銭ハ銘々出ス 壺人前 四十五ツ

一 同廿四日 同国今町泊（新潟県上越市直江津）

旅籠丁百六拾文ツ

十三人分ベ貳貫八十文

銘々銭ニ而出ス

一 同廿五日 同国関川泊（新潟県妙高市川）

旅籠九六百七十貳文

十三人分貳貫貳百七十貳文

此所へ金壺分貳朱 庄蔵出ス

差引百貳十四文 戻り取

是者仲間銭則仲間遣

一 同廿六日 信州善光寺泊（長野県長野市元善町）

旅籠九六貳百拾四文銘々出ス

一 同廿七日 同国稲荷山泊（長野県千曲市稲荷山）

旅籠九六百六十文

十三人分九六貳貫百拾貳文

此所へ金壺分貳朱 作蔵出ス

差引貳百八十四文 戻り取

内貳十六文 筆墨代

引残貳百五十八文 仲間遣ひ

一 同廿八日 同国かり屋原泊（長野県松本市刈谷原町）

旅籠 同断

此所へ金壺分貳朱 庄吉出ス

銘々配分いたス

一 同廿九日 同国村井泊（長野県松本市村町）

右 同断

金壺分貳朱 新蔵出ス

差引貳百八十四文 戻り取

銘々配分致ス

一 同晦日 同国贅川泊（長野県塩尻市贅川）

旅籠九六百六十四文

十三人分九六貳貫百六十四文

此所へ金壺貳朱 坂越屋出ス

差引貳百三十貳文戻り取

内百十四文 其夜酒五合呑

残百十八文 銘々配分いたス

一 四月朔日 同国 上ヶ松泊（長野県木曽郡上松町）

旅籠九六百五十文

十三人分九六壺貫九百七十四文

此所へ金壺分貳朱 紋右衛門出ス

差引四百廿貳文戻り取 銘々配分致ス

一 同二日 同国妻子泊（長野県木曽郡南木曽町吾妻）

旅籠 同断

十三人分右同断

此所へ金壺分貳朱 伊兵衛出ス

差引三百七拾文 戻り取

銘々配分いたス

一 同三日 尾州大久手泊（岐阜県瑞浪市大湫町）

旅籠九六百五十四文

十三人分九六貳貫三十文

此所へ金壺分貳朱 源蔵出ス

差引貳百九十六文戻り取

銘々江配分いたス

一 同四日 同国禅司野泊（愛知県犬山市善師野）

旅籠 同断

十三人分右同断

此所へ金壺分貳朱 兵三出ス

差引三百六十六文戻り取

銘々配分

一 同五日 同国まん場泊

（愛知県名古屋市中川区富田町万場）

旅籠九六百五十六文

十三人分貳貫五十六文

此所へ金壺分貳朱 金十郎出ス

差引三百四十文戻り取

銘々配分

一 同六日 勢州四日市泊（三重県四日市市）

旅籠九六百四十八文

此所へ金壺分貳朱 伊左衛門出ス

差引四百四十八文戻り取

配分致ス

一 同七日 同国くも津泊（三重県津市雲出）

旅籠九六百六十文

金壺分貳朱 河内屋出ス

十三人分九六貳貫百十貳文
差引三百六十六文戻り取配分いたス

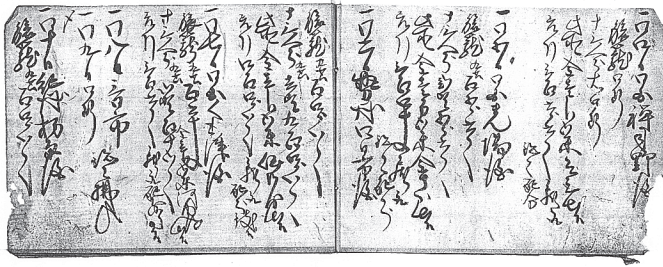


写真 2 尾州禅司野から紀州栃原までの記録

- 一 同八日 三日市（三重県鈴鹿市三日市）
銘々拂ひ
- 一 同九日 同断
- 一 同十日 紀州栃原泊（三重県鈴鹿市三日市）
旅籠九六百四十八文
拾三人分壹貫九百四十八文
此所へ金壹分貳朱 惣五郎出ス
二番廻り
差引四百四十八文戻り取配分いたス
- 一 同十一日 同国長嶋泊（三重県北牟婁郡紀北町長島）
旅籠九六百六十八文
拾三人分九六二貫貳百貳拾文
差引此所へ金壹分貳朱 伊左衛門出ス
貳百四十四文戻り取 配分致ス
- 一 同十二日 同国曾祢泊（三重県伊勢市曾祢）
旅籠九六百八十文
十三人分九六貳貫三百八拾文
此所へ壹分貳朱 河内屋出ス
差引七十六文
- 一 同一三日 同国新宮泊（和歌山県新宮市）
旅籠九六貳百文
一三人分貳貫六百元
此所へ金壹分貳朱 庄吉出ス
差引百七拾貳文不足
銘々出ス
- 一 同十四日 同国那智山泊
（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智山）
木錢六拾文米 代九六百廿四文

壹斗買入

- 十三人分九六貳貫六十文
此所へ金壹分貳朱 源藏出ス
差引三百三十六文 戻り取
配分致ス
壹人前百五十七文当り
- 一 同十五日 同国湯ノ峯泊
（和歌山県田辺市本宮町湯峰）
木錢米ハ九六百三十六文 宿亀屋寿平
十三人分九六貳貫貳百八十四文
此所へ金壹分貳朱 坂越屋出ス
差引貳百十貳文 戻り取配分
壹人前百六十六文当り
- 一 同十六日 同国中え次泊（和歌山県田辺市中辺路町）
木錢四十文 米百廿四文
一斗貳升買
十三人分九六貳貫四十文
此所へ金壹分貳朱 新藏出ス
差引三百八十六文 戻り取配分
- 一 同十七日 同国小松原泊
（和歌山県御坊市湯川町小松原）
木錢四十貳文米百貳十四文
壹斗三升買
十三人分貳貫百九十文
此所へ金壹分貳朱 作藏出ス
差引貳百四十六文 戻り取
配分いたス
- 一 同十八日 同国日方泊（和歌山県海南市日方）
木錢四拾五文 米百廿四文
壹斗三升買
十三人分九六貳貫貳百三十三文
此所へ金壹分貳朱 金十郎出ス
差引百六十三文 戻り取配分
- 一 同十九日 同国三谷泊
（和歌山県伊都郡かつらぎ町三谷）
旅籠九六貳百文
十三人分貳貫六百元
此所へ金壹分貳朱 伊之助出ス
差引貳百文 不足
是ハ銘々出ス

- 一 同廿日 高野山（和歌山県伊都郡高野町高野山）
 一 同廿一日 同断
 一 同廿二日 泉州横山泊（大阪府富田林市横山）
 木錢四拾五文九六米百三十四文
 十三人分九六壺貫九百六十壺文
 此所へ金壺分貳朱 紋右衛門出ス
 差引四百三十四文 戻り取配分
 一 同廿三日 大坂
 一 同廿四日 同断
 〆二泊 旅籠九六貳百文
 十三人分五貫貳百文 庄藏出ス
 兵三
 三百四十八文不足 銘々出ス
 一 同廿五日 大和壺井泊（大阪府羽曳野市壺井）
 三番廻り
 旅籠九六六十四文
 十三人分九六貳貫百六十四文
 此所へ金壺分貳朱 惣五郎出ス
 差引貳百三十四文 戻り取
 一 同廿六日 同国平田泊（奈良県磯城郡田原本町平田）
 木錢四十五文 米百貳十文
 十三人分壺貫八百拾七文
 此所へ金壺分貳朱 坂越屋出ス
 差引六百拾三文 戻り取配分
 一 同廿七日 同国丹波市泊（奈良県天理市丹波市町）
 旅籠百五十五文
 十三人分貳貫四十三文
 此所へ金壺分貳朱 伊左衛門出ス
 差引三百六十八文 戻り取配分
 一 同廿八日 同国長池泊（京都府城陽市長池）
 木錢五拾文 米百貳十四文
 十三人分壺貫九百貳十六文
 此所へ金壺分貳朱 源藏出ス
 差引四百五十貳文 戻り取配分
 一 同廿九日 江州石山泊（滋賀県大津市石山）
 木錢四十五文 米百貳十文
 十三人分壺貫九百三十七文
 此所へ金壺分貳朱 河内屋出ス
 差引四百五十九文 戻り取配分
 一 五月朔日 同国長命寺泊
 （滋賀県近江八幡市長命寺町）
 木錢四十八文 米百廿貳文
 十三人分貳貫貳文
 此所へ金壺分貳朱 新藏出ス
 差引三百九十四文 戻り取
 配分いたス
 一 同二日 同国坂本泊（滋賀県大津市坂本）
 木錢四十五文 米百拾貳文
 十三人分壺貫八百四十五文
 此所へ金壺分貳朱 金十郎出ス
 差引五百拾壺文 戻り取配分
 一 同三日 京都泊
 一 同四日 同断
 〆二日
 旅籠貳百文
 十三人分五貫貳百文 外貳百文 案内賃
 〆五貫四百文
 五月五日ヨリ八人に成ル
 一 同日丹 波国龜山泊
 （京都府京都市右京区嵯峨龜山町）
 木錢四十五文 米百廿四文
 八人分壺貫百廿四文
 此所へ金貳朱と三百拾七文 仲間錢出ス
 一 同六日 津国郡山泊（大阪府茨木市宿川原町）
 木錢四十文 米百貳十貳文
 八人分壺貫六十八文 右同断
 一 同七日 摂州兵庫泊（兵庫県神戸市兵庫区兵庫町）
 旅籠百八拾文
 八人分壺貫四百六十四文 右同断
 一 同八日 同国高砂泊（兵庫県高砂市高砂町）
 御旅籠百八文ツヽ 夜五ツ時船ニ乗
 是者銘々出ス
 一 同九日 船ノ賄ヒ船賃共銘々出ス
 同十日朝迄
 一 同十日 讃州丸亀泊（香川県丸亀市）
 丁百七十文 御旅籠御役とも
 八人分丁壺貫三百六十文
 此所へ金壺分 庄藏出ス
 差引九六貳百六拾文 戻り取配分
 一 同十一日 備前早鴫泊（岡山県都窪郡早島町）

木錢六十文 米丁百廿四文

八人分丁壺貫貳百廿四文

此所へ金貳朱 坂越屋出ス

錢丁三百七十四文 仲間錢出ス

(以下、略)

おわりに

「弘化五年西国順礼道中記泊宿払覚」には、江戸時代においても観光地・参詣場所とされた土地を訪れたことが記されている。“一生に一度は御伊勢参り”と言われるように、庶民にとっての伊勢参り、上方参りは、まさに、一世一代の大旅行であったようである。

史料からは、江戸時代における佐渡の庶民の高い文化意識と旺盛な行動力を知ることができ、その旅程も含め記録された内容は、現代の私たちにとっても大変に興味深いものである。

参考文献等

相川町史編纂委員会 2002『佐渡相川郷土史事典』相川町

鬼頭宏 2010『日本の歴史 19 文明としての江戸システム』講談社

佐藤利夫 1991『海陸道順達日記』法政大学出版局

佐藤利夫 2007『佐渡びとの旅昔話地域学習叢書Ⅶ』両津地区公民館

橘正隆 1947『佐越航海史要』佐渡汽船株式会社

新潟県 1981『新潟県史資料編 9、近世四佐渡編』新潟県

新潟県 1984『新潟県史資料編 23、民俗・文化財二、民俗編』新潟県

観光の中の日蓮と順徳院

―昭和20年代以前の観光から―

本間 裕徳

はじめに

佐渡は遠流の地として、順徳院や日蓮、世阿弥といった政治犯、思想犯が流されてきた。その人たちが遺した佐渡での足跡などは多くの人に護られ、観光にも活かされてきた。中でも、日蓮と順徳院の足跡は多く遺り、島内の日蓮宗寺院には順徳院とゆかりのある寺院もある。

『研究ノート』第3号¹において、停止されていた不定期遊覧事業が再開し、大型遊覧バスの運行、観光コースの設定や観光宣伝などが開始され、佐渡観光が本格的になっていく昭和20年代以降について述べた。今号では、観光が本格的になる前の佐渡において、日蓮と順徳院はどのように位置づけられていたか、二人の関係性をまとめながら、観光パンフレットなどを基に考えていく。

明治期～昭和初期の佐渡観光

昭和20年代以前の佐渡観光の様子をみると、明治期にはすでに日蓮の遺徳を偲ぶ遍路によって佐渡の島巡りが行われており、新潟と佐渡の間の航路が整備される明治期までは巡礼者は佐渡へ小船で渡り、島内を白装束で回っていた。²

明治期の佐渡は、相川金銀山が政府の所管となり、鉱山では海外から指導者を招き、近代化を進めた。明治20年頃の相川には、金銀山の見学者や研修生などによって賑わいがみられ³、その後、観光地としても名が通るようになった。この頃はまだ自動車は佐渡には入っておらず、島巡りは馬車や人力車で回って

いたが、移動中に佐渡の風景などを楽しむことができた。また、佐渡での話を聞き、観光で島を訪れる人が出始めたのもこの頃である。

4

1913(大正2)年には自動車が初めて佐渡に導入され、島内には乗合自動車会社が相次いで開業し、⁵ 島を訪れる人たちもこれらを利用するようになった。この頃はまだ特定のガイドがおらず、島内の^{せきがく}碩学の者などが案内役を務めていた。

昭和10年頃に、乗合自動車会社によって佐渡の観光開発が始まり、観光コースの設定、パンフレットの作成などが行われ、ガイド付き観光もこの頃から始まったが、1941(昭和16)年に第二次世界大戦が始まると、遊覧バスの運行が禁止され、佐渡観光の黎明期が終わった。⁶

日蓮と順徳院の繋がり

ほぼ同じ時代に佐渡へ配流された日蓮(1271年配流)と順徳院(1221年配流)。二人を繋げるものが大きく2点見られる。1点は、順徳院が法華經の信者であったこと。もう1点は、順徳院の近臣が日蓮に帰依したことである。⁷

順徳院は、1221(承久3)年の承久の乱に関わったとして、数名の近臣を従えて佐渡に配流された。その中に妙宣寺の開山になる^{えんどう さ えもんためもり}遠藤左衛門為盛^{あぶつぼうにつとく}⁸(のちの阿仏房日得)、日蓮の高弟日興を開山とする世尊寺の二祖となる^{えんどうとう し ろうもりこく}遠藤藤四郎盛国^{しもこうぼうにちぞう}⁹(のちの下江房日増)がいた。ともに順徳院の崩御後も佐渡にとどまり、遺品として盛国が賜った釈迦世尊立像と法華經一部を護りながら、順徳院の冥福を祈り続け

¹ 2024年佐渡市博物館発行

² 『新潟交通20年史』参照

³ 『佐渡相川の歴史通史編近・現代』参照

⁴ 『新潟交通20年史』参照

⁵ 『新潟交通20年史』参照

⁶ 『新潟交通20年史』参照

⁷ 本間守拙1988『日蓮の佐渡越後―遺跡巡りの旅―』新潟日報事業社参照

⁸ 1189(文治5)―1279(弘安2)千日尼の夫

⁹ 国府入道。妻は国府尼。遠藤為盛の弟。

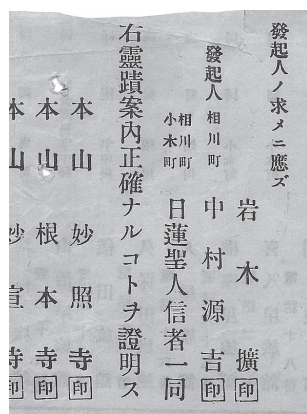
た。¹⁰ 為盛と盛国は、1271（文永8）年に配流されてきた日蓮と出会い帰依するが、盛国が賜った順徳院の遺品から、順徳院が法華経の信者であったことが伺える。¹¹ また、順徳院が在所であった黒木御所に安置礼拝したとされる観音・阿弥陀・薬師・天神¹²のうち、観音像が近隣の本光寺に安置されている。当寺は日蓮に帰依した地頭本間次郎入道の嫡男^{ちやくなん}が開いた寺院であり、入道は観音別当職として黒木御所に出仕していた。

日蓮が佐渡に配流されたのは、順徳院崩御後であるため、日蓮と順徳院とは直接的な繋がりはない。しかし、順徳院の近臣や監視役であった本間氏などが日蓮に帰依し、日蓮の佐渡での生活を支え、また、順徳院の遺品を日蓮に帰依した本間氏が開いた寺院などに安置したことは、日蓮の教えに身を置きながらも、順徳院の遺徳を偲んでいたと考える。

佐渡観光における日蓮と順徳院の位置づけ

観光などのパンフレットは、作成者の視点によって内容が異なっていく。

日蓮信者が発起人となって作成された「三本山證明 日蓮聖人佐渡御霊蹟案内」（図1）



「日蓮聖人
佐渡御霊蹟案内」より
（図1 部分拡大）

や、日蓮宗寺院も関わっている佐渡史蹟観光協会が発行した「日蓮聖人佐渡聖跡霊場参拝と観光の栞」に掲載されている「日蓮上人佐渡聖跡霊場巡拝所の略縁起」（図2）を見ていく。島内の日蓮宗寺院や日蓮の霊蹟紹介が中

心となっているが、その中に真野御陵と黒木御所など順徳院に関係する地も名を連ねている。日蓮宗寺院や信者などによって作成された日蓮の霊蹟を案内するパンフレットの中に、順徳院に関係する地も含まれていることは、順徳院の佐渡配流が、「佐渡での日蓮の生活・活動に影響を与えており、日蓮ゆかりの地とともに参拝すべきところ」と考えられ、日蓮と順徳院を合わせて回ることが、日蓮の佐渡での生活を語るうえで、重要なパーツであることを示している。そして「三本山證明 日蓮聖人佐渡御霊蹟案内」が、1925（大正14）年に作成されたものであることから、この頃にはすでに、日蓮と順徳院を組み合わせた佐渡の案内が考えられていたことが分かる。

昭和11年に発行された「佐渡観光番付」（図3）は、日蓮寺院や信者ではない目線での、佐渡観光黎明期の様相を知る資料の1つである。この番付は、両津夷にあった穀物検査支所が、島外へ穀物を売り出す際に、佐渡を紹介するために作成したものであるが、当時の佐渡島民が、純粋に佐渡を紹介する時に、何を見どころとして紹介しているかを窺える資料である。この中においても、日蓮と順徳院に関係する地が複数みられることは、島民から見ても、二人の存在がいかに大きなものであり、佐渡を知ってもらいたい目玉になっていたかを示す一端となっている。

先に述べたとおり、明治期にはすでに日蓮信者による巡礼で島巡りが行われていた。また、順徳院についても、1852（嘉永5）年に吉田松陰^{よし だしょういん}¹³と宮部鼎蔵^{みやべ ていざう}¹⁴の真野山火葬塚（真野御陵）参拝¹⁵をはじめ、与謝野寛・晶子夫妻¹⁶など多くの文人が佐渡へ渡り、日蓮・順徳院を偲び和歌などを残していることは、島外の

¹⁰ 本間守拙1988『日蓮の佐渡越後－遺跡巡りの旅－』新潟日報事業社参照

¹¹ 本間守拙1988『日蓮の佐渡越後－遺跡巡りの旅－』新潟日報事業社参照

¹² 本間守拙1988『日蓮の佐渡越後－遺跡巡りの旅－』新潟日報事業社参照

¹³ 1830（文政13）－1859（安政6）山口県出身。思想家

¹⁴ 1820（文政3）－1864（元治元）尊王攘夷派の活動家。

¹⁵ 吉田松陰著『東北遊日記』より

¹⁶ 1924（大正13）年と1934（昭和9）年来島

人にも佐渡に流された日蓮と順徳院は、関心事であったことが窺える。

日蓮・順徳院の足跡や伝承は佐渡島内の広範囲に広がり、来島した人たちは、佐渡の自然を感じながら、それぞれのゆかりの地を訪れた。観光地としての佐渡は、歴史と自然を体感できる島であり、その代表として、日蓮と順徳院が挙げられたと考える。

これからの観光地・佐渡において

日蓮と順徳院のゆかりの地が、参拝地・観光地として昭和20年以前にはすでにほぼ確立していたことは、パンフレットなどから分かるところである。

順徳院はその生涯を佐渡で終えるが、20年余りの在島期間に詠んだ和歌や伝承の数々も、多くの人の興味を引くところである。また日蓮は、2年余りの在島期間で赦免されるが、自身が置かれた現状こそが、「法華経を体現する者である」との考えの正当性を確立し、布教活動に勤しんだ。順徳院とは対照的な佐渡配流であった。「観光」という視点でみた時に、二人の繋がりよりも「この地で最期を迎えた順徳院」、「法華経の行者となった日蓮」という、それぞれの独立したストーリーによって、現代の観光地の在り方へと繋がる要因になったように考えるが、今後の課題としたい。

まとめ

佐渡の歴史において、「流人」「金銀山」は外すことができない部分であろう。佐渡には多くの流人が流されてきたが、佐渡の島民にとっては、島の外の文化などを佐渡へ伝えてくれる特別な存在であったことは、今日まで護られてきた関連するものの多さからも分るのではないだろうか。

日蓮の生涯において、佐渡での生活はその後の布教活動において重要な位置を占めており、順徳院も佐渡でその生涯を閉じている。相見えることがなかった二人ではあるが、同

じ時代を生きた二人の存在・影響力は大きく、その中で繋がりがみられることは、佐渡の歴史を知るうえで必要なことであり、歴史を辿る観光にも大きく寄与するところである。

今日の観光は、SNSなどで話題の場所などへ集中する傾向にあり、佐渡の観光も例外ではないだろう。今日まで連綿と護られてきたものの歴史を感じながら、いかに観光につなげていくかが課題である。

【参考文献等】

- ・九学会連合佐渡調査委員会1964『佐渡 自然・文化・社会』株式会社平凡社
 - ・佐渡郡教育研究会・両津市教育研究会 1964『概観 佐渡』概観佐渡刊行委員会
 - ・新潟交通二十年史編纂室1966 『新潟交通20年史』新潟交通株式会社
 - ・山本修之助1974『佐渡叢書 第5巻』 「佐渡国寺社境内案内帳」佐渡叢書刊行会
 - ・山本修之助・中俣正義1979『日蓮の佐渡』新潟日報事業社
 - ・本間守拙1988『日蓮の佐渡越後一遺跡 巡りの旅一』新潟日報事業社
 - ・財団法人佐渡博物館1993『図説 佐渡島 自然と歴史と文化』新潟交通株式会社
 - ・相川町史編纂委員会1995『佐渡 相川の歴史 通史編 近・現代』相川町
- *本文中のパンフレットはいずれも佐渡博物館所蔵

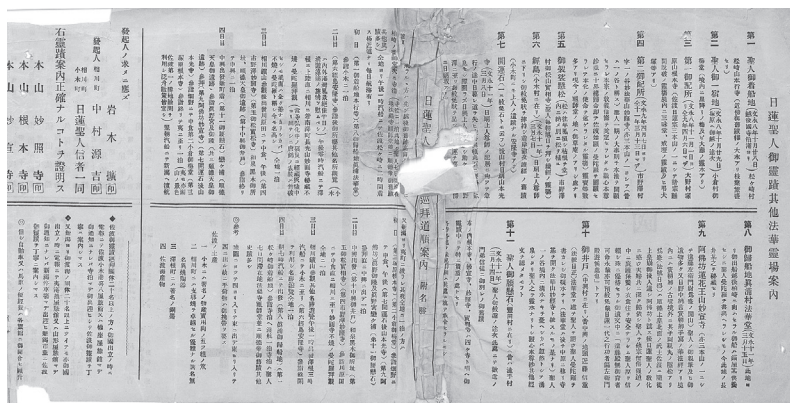
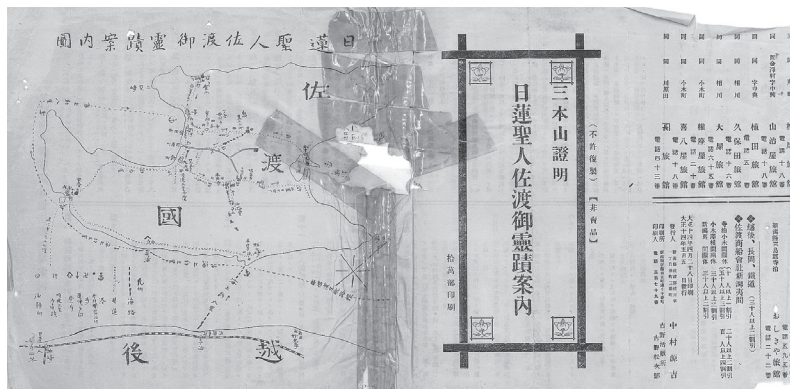


図1 「三本山説明 日蓮聖人佐渡御霊蹟案内」
(大正14年5月5日発行)

日蓮上人佐渡聖跡霊場巡拝所の略縁起			
本行寺	日蓮上人佐渡舟泊の愛跡 (船生所あり)	妙照寺	日蓮上人二子崎舟泊に水手妙佐渡御願 本行寺御願の霊跡(御願の霊跡あり)
御梅堂	日蓮上人 鉢巻の霊跡 (御願の霊跡あり)	実相寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
根本寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)	御岩庵	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
本光寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)	法華堂	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
妙宣寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)	妙法寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
世尊寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)	真跡御陵	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
安隆寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)	黒木御所	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
妙経寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)	本光寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)
妙円寺	日蓮上人の御願の霊跡(御願の霊跡あり)		

図2 佐渡史蹟観光協会「佐渡聖蹟霊場参拝と観光の栞」(発行日不明)
部分拡大

佐渡観光番附									
横綱	大関	關脇	小結	前頭	〃	〃	〃	〃	〃
眞野 御陵	相川 鑛山	度津 神社	小比 叡山寺	根本 寺	阿 佛 坊	明治記念堂	黒木 御所	妙 照 寺	御 所 櫻
眞野 宮丘上村	相川 町山上	羽茂 村飯岡	小比 木 叡町	新穂 村大野	眞野 佛坊村	金澤 村千種	金澤 村泉	二 宮 村	海潮 寺前庭町
人皇第百八十四代順德天皇御火葬塚在島二 十二年間祀所ノ月ヲ眺メテ、曉去セラレ	孝長六年ノ堀始メ年額金銀百五十萬圓 杭道延長十七里杭深一千五百尺	國幣小社祭神五十猛命	最古寺院特別保護建築物金堂、弘法堂アリ	日蓮上人八ヶ月間謫居難行ノ地	日蓮上人ノ弟子阿佛坊開基境内ニ忠臣日 野食朝卿墓アリ	招魂社、珍ナル博物館、境内坂下佐長銅像アリ	順德天皇九木造リノ御所跡	日蓮上人二ヶ年間謫居ノ地	順德天皇御遺愛ノ古櫻天然記念物
順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種	順德天皇御遺愛ノ八重ノ葉ハ、白梅 ニテ珍奇ノ品種

図3 「佐渡観光番附」(昭和11年1月1日発行) 部分拡大

植物愛好家としての近藤福雄

—来島した植物学者との交流から—

池田哲夫^{*1} 菊池はるみ^{*2}

はじめに

近藤福雄(1900(明治33)～1957(昭和32))は、佐渡のセミプロの写真家として知られている。生前撮影した写真乾版は約8,800枚にもおよんでいるというが、そのうちの一部はすでに『佐渡万華鏡』、『大正・昭和佐渡写真集』として刊行されている。

未刊行のまま残っている写真にも産業、植物、風景、風俗などアーカイブとして貴重なものが多い。

18歳で写真機を手に入れたという近藤は、1920(大正9)年6月に来島して中興の植田旅館に宿泊した柳田国男^{*3}に、柳田の編集する雑誌『郷土研究』の寄稿者であった伯父の茅原鉄蔵^{*4}を介して接触したことを機に、佐渡へ来島する著名な文化人、学者の写真撮影や案内人(ガイド)をつとめるようになった。【写真-1】



写真-1 1920年来島の柳田国男とともに
(左から2人目柳田国男 右端近藤福雄)

やがて近藤の眼は佐渡の文化や自然にも向けられるようになり、いつのまにか佐渡の各界の碩学たち

も大事な客の案内には近藤に依頼するのが慣わしとなった。1933(昭和8)年には来島した植物学者の牧野富太郎^{*5}を案内したこともあって、山野の植物への関心と造詣をふかめていったという[本間2000、2002]。

近藤は来島する文化人や島内の文化人等と親しく接した影響や生来の探究心もあってか、観光や考古、植物などジャンルにかかわらず多知多識であったという。その多知多識ぶりが乞われ『佐渡民報』^{*6}の客員記者として招かれ健筆をふるい、同紙に「島の開発案」や「島のあれこれ」などと題した連載をしている。

近藤は1957(昭和32)年11月15日に57歳で急逝したが、佐渡民報社ではその死を悼み同年12月21日発行の『佐渡民報』第611号を故近藤福雄追悼号にあて、特集を組んでいる。

そこで、本稿では、植物に造詣の深かった近藤の一面を、記者として活躍した佐渡民報紙などを引用しつつ、佐渡の植物研究に果たした役割について述べてみたい。

1. 野草写真家としての近藤福雄

1933年には佐渡中学、佐渡郡小学校長会、新潟博物学会主催の佐渡及び弥彦山附近植物採集講習が開催されており、そこへ講師として招かれたのが植物学者の牧野富太郎であった。

植物採集講習について「故牧野富太郎先生と佐渡」(『佐渡民報』1957(昭和32)年1月26日付け第569号)に近藤は次のように記している。

(牧野富太郎は)昭和8(1933)年の7月下旬に招かれて佐渡へ来島されたのであります。それは佐渡中学(旧制)、佐渡郡小学校長会、新潟博物学会の主催で佐渡及び弥彦山附近植物採集講習の講師としてその当時新潟高等学校の真保一

*1 両津郷土博物館非常勤学芸員

*2 佐渡植物園管理職員・野草研究者

*3 日本の官僚、民俗学者

*4 旧金井町大和田在住。佐渡の農業改良等に尽力。

*5 奇しくも2023年には、NHK「連続テレビ小説」で植物学者牧野富太郎をモデルとした『らんまん』が放送された。テレビでは紹介されなかったが、佐渡を訪ねた牧野富太郎を案内したのも近藤であった。

*6 昭和21(1946)年創刊。

輔教授が指導に当たられたので越後方面からの参加者もあり、遠く当時富山高等学校校長であった前両津高校長菊池勘左衛門先生、東京から前川文夫^{*7}先生、佐渡中学校の秋庭（銈一郎）先生、金沢校の上野（巳之吉）先生、その他、受講生の中には現両津高校の北見秀夫先生、相川校の小菅仁助先生などは最年少者として参加された事は二ノ岳附近の記念撮影の写真で見れば判然として居ります。

そのときの募集要項が手元に残って居るので参考までに会費の事にふれておきますが、参加料佐渡在住者1円という額、河原田の宿泊料が1円50銭、入川は1円という額であった事も二タ昔前の話でその当時が偲ばれるのであります。【写真－2】

7月下旬で暑中休暇に入ろうというときであったが先生は山高帽をかむってこられたことを覚えている。誰かがその理由をたずねたら暑気のとときにこんな冬向きのものを被ると涼しくて良いのだとケロリとしておられた。(中略)



写真－2

植物採集講習入川海岸にて(1933(昭和8)年7月26日)左端北見秀夫、3人目真保一輔、6人目(中央)牧野富太郎、7人目上野巳之吉、9人目秋庭銈一郎、10人目(前列)近藤福雄

^{*7} 植物の分布や進化に関する高邁な学説を立てたことで知られる。

島ではどういう植物の新品種を発見されたのかは自分は学者でないでないので知らないが、それは島の植物分類の方に明るい北見秀夫先生にでも聞かなければわからないが、昭和8年頃も写真を写す者は写真屋においてはアマチュアではほとんどなく、昭和7年の秋から現在まで終始一貫写真にたずさわっている筆者であっただけに牧野先生の動静をカメラに収めておいた事は良い記念物となった訳でもあります。

此の写真に出て居る竹は小説以上の数奇の運命をたどったものであります。そもそも此の矢竹はとあらたまって書いても良い位のものです。先生が手をつけて居る矢竹は矢島の頂辺中央部南寄りに生育していたもの特別者で無ければチョンマゲを結った番人の老人が登ることを許さなかったのですが、顔見知の老人は心置きなく島の頂上へ上げ実査することを得た。

(文中()は筆者が加筆した)



写真－3

小木にて双生竹を手をしている72歳の牧野富太郎
1933年7月29日撮影

現在、佐渡高等学校に秋庭銈一郎が佐渡中学校在職中に採集した腊葉標本が保管されている。

秋庭は博物の教員として佐渡中学校に 1922(大正 11) 年 5 月に就職、1933(昭和 8) 年 3 月に退職している。牧野の来島時にはすでに退職しているが、牧野とそれ以前から交流があったものかどうかいさつは不明である。佐渡高校に保管されている秋庭の採集した腊葉標本を牧野が確認している*8。

牧野の佐渡での行動について『牧野富太郎植物採集行動録・昭和編』（高知県立牧野植物園 2005）には以下の様に記録されている。

昭和 8 年 7 月

24 日 渡海。

（日記中のカレンダーより）

25-27 日 越後佐渡（新潟県佐渡島）

26 日 佐渡北山（新潟県佐渡島）

30 日 佐渡（新潟県佐渡島）新潟

（新潟県新潟市白山浦阿部儀

作氏*9 を訪フ）

牧野の佐渡滞在は 7 月 24 ～ 30 日までの 6 泊 7 日であった

2.『佐渡に於ける薬草』の発行

旧制佐渡高等女学校の教員で植物採集講習にも参加した上野巳之吉は、薬用植物の調査を進め、佐渡で確認できた 320 種の薬用植物をとりあげた B6 版 215 ページに及ぶ『佐渡の薬草』を 1934(昭和 9) 年 5 月に発行している〔私家本 1934〕。

序文を新潟高等学校（旧制）の真保一輔（生物学教室）が書き、自序では上野が菊池勘左衛門、秋庭銈

一郎に謝辞を述べるとともに巻頭グラビアの植物写真が近藤福雄の撮影によるものであることを記している。

グラビア写真は 14 頁にわたって、島内に自生しているものや栽培されているものまで、167 種の薬用植物を採取直後の生の状態で白紙の上におよそ 12 種類ずつ載せて撮影している。極論ではあるが短期間のうちに対象とする植物を採集し写真に収める偉業を成し遂げる知識と技能は、近藤が植物に対する並々ならぬ知識の持ち主であったたことを想起させる。



写真－ 4『佐渡に於ける薬草』（表紙）上野巳之吉著
巻末に付録として病名と効果のある薬草名 139 種が付されている。



写真－ 5 同書グラビア部分
近藤福雄撮影による薬用植物

*8 秋庭はすでに博物学では著名であったと思われ、1926(大正 15) 年 8 月に鳥獣調査で佐渡を訪ね、偶然にも日本全土から絶滅したとされていた野生トキの生存を確認したことでも知られる、福岡県立明善中学校長で鳥類生態学者の川口孫治郎が佐渡中学で秋庭銈一郎と面会しており、「意外にも旧知秋庭銈一郎君なりき。同君は博物専攻の人」と書き残している。『佐渡の鳥』新潟大学朱鷺自然再生学研究センター 2012)

*9 新潟在住のサクラの研究者として知られている。

3. 佐渡植物園開設と薬草調査

1948(昭和23)年には度津神社神域及び同所妹背山一帯に佐渡植物園が設置されている。開園にあたっては近藤の仲介により、植物園の有志とともに東京の牧野宅まで指導をうけに上京している。

近藤は「建設当初から参画して居り、一次は妹背山植物園にしようかとの話も起きた位であったが、誰に恐れることいらん、堂々と佐渡植物園を名乗ることをおすすめしたのであります」と、1953(昭和28)年7月23日付け第354号『佐渡民報』「島のあれこれ(59)植物採集記(9)」に記している。1949(昭和24)年には本田正次^{*10}、竹田久吉^{*11}から現地指導を受けている。

1951(昭和26)年8月には佐渡総合開発策の一つとして、新潟県佐渡支庁が中心となって薬用資源調査のため日本大学教授木村雄四郎^{*12}を佐渡に迎えて指導を受けている。

その折、佐渡植物園にも立ち寄り、同園の薬草園の「ほそばのおけら」を見つけ、当時薬草界で問題になっていることなどを語りあったことを「島の開発案」『佐渡民報』(1951(昭和26)年12月12日付け第279号)のなかに近藤が記している。

1953(昭和28)年7月9日付け第353号『佐渡民報』「島のあれこれ(58)植物採集記(8)」には、「高山植物及び山草に興味を覚え、学究的でないが、島の珍しい植物は細かいものでも栽培して見たいので、小鉢に植えたり、庭に植えたりして普通の場所で見られないものも或程度集めて居る。(中略)小型の山草鉢には蘭科植物を一杯作って居るので、それを枯らさずに保護している(中略)写真で植物の自然生育状態の撮影等をやった関係で、現地撮影ではどうしても表現できないものもあるので、必要に

せまられたと云わうか、好きであったと云わうか其の内に植物の名を他から問われたりしたので、いきおい覚えて置かねばあれもわからん、これも知らんでは通らないのであるし、又佐渡山岳会を創始して山へ登ることが多く、これも変わった植物を見る機会が多かったので、覚えることに拍車をかけた」と意欲的に植物にかかわったことを記している。

近藤は佐渡植物園の開園にあたり、自宅で栽培していた植物200鉢を寄贈したとも言われている。1957(昭和32)年には近藤の仲介で、佐渡植物園に本田正次の揮毫した標柱が立てられていというのが現在はない。



写真－6 昭和24(1949)年6月23日 度津神社
神橋擬宝珠右となり竹田久吉、その右2人目本田正次

おわりに

写真家としての近藤は著名であるが、植物愛好者としての一面は知られていない。植物園にも植物写真150枚を提供したようであるが、その実態も不明である。今後さらに近藤の残した写真をとおして近藤の成した仕事を明らかにしたいと思っている。

参考文献等

- 近藤寿雄 磯部欣三編 『大正・昭和 佐渡写真帖』2000
富山治夫編 『近藤福雄写真集1917～1945集
佐渡万華鏡』(株)郷土出版社1994
本間雅彦「近藤福雄」『佐渡相川郷土事典』相川町2002
『佐渡民報』掲載号等は本文中に記載した
本稿で使用した写真は佐渡博物館所蔵

^{*10} 熊本県熊本市出身の植物学者。東京大学名誉教授。昭和天皇の植物研究の相手も務め、伊豆や那須に同行した。

^{*11} 1905年(明治38年)に日本山岳会を創立し、のちに同会の第6代会長を務めた。また、初代日本山岳協会会長、日本自然保護協会会長を歴任した。

^{*12} 日本大学教授、日本薬史学会会長で和漢薬の研究者。